

2001年12月25日

ベツレヘムの優しさ

[聖書]ルツ記

[序]

クリスマスは「嬉しい知らせ」を私たちに伝えてくれます。その一つをお話させていただきましょう。救い主イエス・キリストは当時の世界であるローマ帝国の片隅、植民地であるユダヤの小さな田舎町ベツレヘムの馬小屋でお生まれになりました。どうして世界の中でも一番小さい町ベツレヘムで、しかも馬小屋の中で救い主がお生まれになったのでしょうか。

それは私たちの間では、小さな者・貧しい者が卑しめられているからです。小さな者・貧しい者が大事にされ、尊ばれる時に、私たち誰にとっても暮らしやすい、平和な世界が来ると神さまは私たちの心に語りかけておられるのです。

さらにベツレヘムの町が、とても大切な美しいドラマの舞台だったからでもあります。今日はそのお話をさせていただきます。

[1]

旧約聖書にルツ記という小さな書物があります。今から 3000 年以上も昔に生きたナオミとルツという二人の女性の話です。ナオミはベツレヘムに生まれましたが、大飢饉に見舞われて、夫と二人の息子と一緒に、東の国モアブに逃れました。

しかしそこで、夫を失います。息子二人が成人して地元の娘と結婚し、やれやれと思ったのもつかの間、二人とも相次いで死んでしまいました。年老いたナオミは故郷のベツレヘムに戻ることにして、二人の嫁には実家に戻って再婚し、幸せに暮らすようにすすめました。オルパは泣きながら実家へ戻って行きました。しかしもう一人の嫁ルツは、何としても離れません。モアブ人を快く思わないユダヤ人の町ベツレヘムに、ナオミに付いてやって来ました。そして畑の落穂拾いをして、ナオミを支えます。この落穂拾いの光景は、ミレーの絵で有名です。

やがてルツはナオミの親族ボアズと結婚して、二人の間にオベドが生まれます。このオベドの孫がダビデ。ユダヤの歴史上最高の王です。ユダヤ人たちは後に、世界の救い主メシアはダビデ王のような方だと期待するようになったほどの人物です。そして約 1000 年後に、ダビデの家系から、イエス・キリストが誕生したのです。ヨセフとマリアは、人口調査の登録のため一族の町ベツレヘムに行っている間に、イエス・キリストが誕生したのです。

さてルツとナオミとは、いわゆる「嫁と姑」の仲でした。嫁と姑は、人間関係の中でも難しい

間柄だと言われています。しかしルツ記をよみますと、私たちはとても明るい気持ち、心洗われる思いになります。

ナオミは不幸な女性でした。大飢饉のために生まれ故郷を捨てて異国に暮らさなければなりません。そして夫も二人の息子をも失いました。しかし嫁のルツが彼女を見捨てずに、ズーっとそばにいて一緒に暮らしてくれました。その上良い再婚をして、オベドという孫を抱く幸せを与えてくれました。

人生、不幸なことばかりが続くものではありません。神さまは必ず祝福を備えてくださっているのです。ナオミはその喜びを晩年になって、遂に手にすることが出来たのでした。しかも嫁と姑という難しい人間関係を通じて幸福になったのでした。ナオミとルツという女性たちが、特別に立派な人柄だったからなのでしょう。

ルツは老いた姑ナオミを見捨てることがとても出来なかったのです。自分は一人侘しく老後を暮らすことになるけれども、せめて若い嫁たちは幸せになって欲しいと案じる優しい人を、とても一人にすることが出来なかったのです。そしてルツも自分の幸せだけを考えないで、この人を守ろうとしたのでした。

悲しみで一杯になっている孤独な人のそばに一緒に居ようと思う心は、神さまが私たち誰にもお与え下さっている心です。ただルツはその心にひたむきに生きたという点で、私たちと違いました。ユダヤ人はモアブ人を軽蔑していました。そんな人々の所に行って暮らすことは難儀なことです。まして再婚するなどとても考えられないことでしょう。私たちの多くは、待ちかまえている難儀をあれこれ考え始めて、せつかく心の底からわき上がってきた美しい愛の心をしばませてしまうのです。

しかし神さまは、ルツのひたむきさに伝えてくださいました。優しい夫ボアズを備えてくださったのです。愛にひたむきに生きる者を、神さまは決してお見捨てにならない——ルツ記はそんな勇気を私たちに与えてくれます。

ルツが生み、老いたナオミが懐に抱いた子どもを、人々は「オベド」と呼びました。「仕える者」という意味の名前です。ナオミとルツは、お互いに相手の幸福を自分の幸福よりも先に考えて、仕え合いました。ひたむきに愛をもって仕える者に、神さまは必ず豊かな祝福をくださるのです。ベツレヘムは嫁と姑の壁を打ち砕く愛の美しさを証する町でした。

[2]

今日世界各地に広がる民族紛争。それに宗教が拍車をかけていると言われます。宗教は

本来、人を救うことを任務としているはずなのに、人種・民族の融和に無力であるばかりか、争いの火に油を注ぐ原因すら作っているとは、何と悲しい現実でしょう。

ある民族が圧倒的な力をもって他を押さえつけなければ、戦争は治まらないのでしょうか。ある宗教が他の宗教を飲み込んでしまわなければ、世界に平和は来ないというのでしょうか。それが神さまの望んでおられることなのでしょうか。

確かに旧約聖書の中には、人種・宗教的差別の言葉があります。

「混血の人は主の会衆に加わることができない。——アンモン人とモアブ人は、主の会衆に加わることができない。」(申命記23:25)

「この地の民からも、異民族の嫁からも離れなさい」(エズラ記10:11)

そこでイエス・キリストの最初の弟子たちも、この旧約聖書に立つユダヤ教信仰の中で育ったので、外国人と一緒に礼拝するとか、食事を一緒にすることすら、してはならぬことのように思っていました。その様子が新約聖書のあちこちに記されています。

しかし旧約聖書には、このような排他的なユダヤ主義とは異なる別のメッセージも流れているのです。その一つがルツ記です。ルツ記の主人公はユダヤ人のナオミとモアブ人の嫁ルツでした。そしてこの民族・宗教の違う二人が、しかも「嫁と姑」という難しい間柄にもかかわらず、愛によって固く結ばれ、ベツレヘムの町で助け合って共に生き、神さまから祝福されました。ベツレヘムに住むユダヤ人たちも、ルツを受け入れ、ボアズとの結婚を喜び、二人の間に生まれた混血の子を「オベド」(仕える者)と呼んで、皆で祝福したのです。

ルツが食べていく必要に迫られて、畑に落穂拾いに出かけた時、ボアズの畑で親切な扱いを受けました。ルツはボアズの前にひれ伏して「よそ者の自分に厚意を示してくださるのは何故ですか」と尋ねました。ルツはよそ者として厳しい扱いをうけることを覚悟していたのです。

ボアズの答はこうでした。「主人が亡くなった後も、姑に尽くしたこと、両親と生まれ故郷を捨てて、全く見も知らぬ国に来たことなど、何もかも伝え聞いていました。どうか主が、あなたの行いに豊かに報いてくださいますように。」ボアズのこの言葉の中に、ベツレヘムのユダヤ人たちが、ルツのひたむきな愛の姿に心をうたれた、次第に彼女を受け入れるようになっていった様子が伺われます。それがボアズの耳にも届いていたのです。

この世界には、どんなにひたむきに愛しても、人種の違い・宗教の違い故に、受けいれても

らえない現実があります。しかしベツレヘムの現実は違っていました。人々はルツのひたむきさを、そのまま受け入れることが出来たのです。そしてそれこそが、神さまの望んでおられることだったのです。

ベツレヘムは、人種差別の壁を打ち砕く喜びを証しする町でした。世界中がベツレヘムにならなければと思わずにはおれません。

[3]

今も中東紛争の真っ只中にあるエルサレムには、2000年前旧約聖書の信仰の中心である立派な礼拝所が建てられていました。しかしその礼拝所の庭には、身分によって座席が区別されていて、ユダヤ人以外の外国人は、たとえ改宗した者であっても、聖所から一番遠く低い場所に坐らされました。しかもそこから一段上の聖所に近いには進めないように石壁が建てられ、「これ先外国人は入るべからず。越えた者は死刑。」という警告が壁にはめ込まれていたそうです。

こともあろうに、神さまを礼拝する場所で、なおそのような人種差別がなされていたとは、何と悲しいことでしょうか。しかもその誤りに気が付かないで、真面目に真剣に礼拝が捧げられていたのです。これが私たちの現実なのです。これでは世界は救われません。そしてこれは、全世界の全ての人を、ご自分の子どもとして愛しておられる神さまのお心ではありません。

そこで神さまは、人と人との仲を人種の違いで隔ててしまう壁、敵意を生み出す心の壁を取壊して平和を打ち立てるために、救い主イエス・キリストをこの世にお送りになったのです。

イエス・キリストは自分の幸せよりも、人が幸せになることに心を砕き、ひたすらにお仕えになりました。そして自分を妬み、敵意を抱いて殺そうとする人々を救うために、ご自分から進んで十字架にかかって死なれました。イエス・キリストには、自分の正しさを力づくで相手に認めさせるとか、間違っている者を叩きつぶしてしまうという心は、全くありません。

十字架の愛は、その人が自分の誤りに気がついて、それを直そうとするのをじっと待つ愛、その人を救うためならば、自分の命を差し出してしまう愛です。この十字架の愛によって、人と人との間を引き裂いている敵意を滅ぼされたのでした。もしも私たちの心にも、十字架の愛が満たされるならば、私たちの周りにも平和が生まれてくるでしょう。

中国服を着た華人、ベールを顔に巻くマレー婦人、サリーをまとったインド婦人、T シャツ・半ズボンでサンダルを履いたフィリピン人のメイドさん、工事場で黙々と働くバングラデッシュ・パキスタン・ミャンマー人等々、私たちは多種多様な人々と接して、毎日暮らしています。私

はよく「韓国人か」と聞かれます。

都市国家シンガポールは多人種複合国家です。政府は中国系76%、マレー系14%、インド系7%、その他の人種 3%という割合がくずれないようにして、バランスを保ちながら融和した一つの強力な国家を作り上げていこうとしています。そして世界でも模範的な安定した社会ができました。

しかし周囲の国からよい働き口を求めてやって来た外国人の若者たちは、「シンガポール人は嫌いだ」と言います。軽蔑され、差別を受けるからだと言うのです。ベツレヘムの優しさは、ここシンガポールでも必要なのです。日本人にとっては、シンガポール人以上に、イエス・キリストの愛、十字架の愛が必要なのではないのでしょうか。